

「治療教育」における児童の福祉と文化：三田谷 啓(さんだやひろく)の仕事

著者	川北 典子
著者所属(日)	平安女学院大学現代文化学部現代福祉学科
雑誌名	平安女学院大学研究年報
巻	4
ページ	21-29
発行年	2004-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1475/00001205/

「治療教育」における児童の福祉と文化

さんだ やひく
-- 三田谷啓の仕事 --

川北 典子

1. はじめに

明治・大正期より、児童文化の歴史には、さまざまな分野の人々がかかわってきた。三田谷啓もそのひとりである。医学・治療教育・母性保護・児童保護・育児教育等々、種々の分野で活躍した彼の業績のなかには、絵本やおはなしなどの児童文化財に関する著述が少なからず見られる。いずれも、それらの児童文化財が、児童の養護育成、そして教育において、重要な役割を果たすことを説いたものである。

また、三田谷は、初代の大阪市社会局児童課長に就任、大阪市における児童福祉行政の第一線にも立った。在職中は、「児童相談所」をはじめ、「産院」「乳児院」「少年職業相談所」など、新しい社会施設を次々に開設した。そして、大阪市を退職した後は、懸案であった障害を持つ児童のための「治療教育院」の設立をも実現させている。

しかしながら、従来の児童文化・児童福祉の歴史のなかでは、三田谷啓の名は殆ど見る事ができなかったといってもよい。それは、あまりにも多岐にわたる業績によって、「細分化され、個別の学問を深めてきた現代の科学や学問の視点からは、かえって三田谷の実践をみにくく⁽¹⁾」させてきたことにも起因する。

本稿では、三田谷啓の数々の業績のなかから、彼の提唱した科学的育児法、とりわけ乳幼児の精神面に児童文化財が及ぼす影響について再検討を試みるとともに、彼のライフワークでもあった広義の児童研究及び児童相談活動について、その意義を考察する。

2. 三田谷啓の略歴

三田谷啓は、1881（明治14）年、兵庫県有馬郡塩瀬村（現・西宮市塩瀬町）において、農家の長男として生まれた。小学校卒業後、家業の手伝いを余儀なくされたが、勉学の志を捨てきれず、18歳の時に一大決心をして大阪に出る。19歳で大阪府立高等医学校（現・大阪大学医学部）に入学し、卒業後は上京、東京医科大学精神病学教室に出入りする機会を得て富士川游の助手になった。まもなく、志願兵として1年間の軍隊生活を送った後は、再び富士川宅に寄宿し、かねてより希望していた治療教育研究を始めた。

そして、1911（明治44）年5月には、ドイツに留学をする。9月にゲッチンゲン医科大学に入学、翌1912（明治45）年6月には、論文提出、口答試問にも合格し、「ドクトル」の学位を得た。また、同年9月から翌1913（大正2）年1月まで、文科大学にも籍をおいて、児童心理学（治療教育学）を学んだ。その後、1914（大正3）年2月まで、ミュンヘン大学において、やはり文科・医科両大学で児童学を勉強した。そこでは、また、著名な精神科医クレペリンより直接の指導を受け、さらに、ミュンヘン郊外のハール精神病院で、知的障害児を対象にビナー・シモン知能検査を実施するなど、実践的な学びについても経験を重ねた。これらの研究をとおして、三田谷は、日本における知的障害児の「治療教育」施設設立の必要性を強く感じるようになったのである。

そして、1914（大正3）年10月に帰国後は、再び恩師富士川游のもとで、治療教育院設立のための土地探しに奔走するが、これは叶わなかった。だが、日本児童学会の幹事となり、機関誌「児童研究」

及び「中外医事新報」の編集に携わったほか、ミュンヘンで学んだ知能検査を日本へ導入するために研究を開始するなど、意欲的な活動を行う。その成果として、1915（大正4）年には、『学齡児童智力検査法』（児童書院）を刊行、翌年には、その用具として『学齡児童智力検査函』（南江堂）を世に送り出した。その頃すでに、ビネー・シモン法の紹介はされていたが、実際に使用可能なものとしては、これが、「日本で最初の知能検査用具」であったといわれる。

一方、日本児童学会の中心人物であった富士川游は、1916（大正5）年5月に、日本で最初の児童相談所といわれる「児童教養相談所」を開設した。三田谷は、主任として、その相談所の実質的な運営を任されることになる。さらに、翌年、東京市外目黒に、日本で最初の専用建物と付属遊園を備えた児童相談所「児童教養研究所」が、北垣守によって設立されると、その理事も兼務することとなった。この研究所は、啓蒙誌『児童』を発行、また、一般の人を対象にした「児童協会」なる組織も持っており、これらの理念や活動は、後の阪神地区での三田谷の仕事に多大な影響を与えたと思われる。

こうして、東京での生活が軌道に乗り始めた1918（大正7）年、三田谷啓は、大阪に招かれる。そこで、富士川とも相談の上、2年間の約束で、大阪市役所に勤務することとなった。1919（大正8）年4月には、新設の大阪市社会局児童課長に就任する。そして、かねてより三田谷が主唱していた児童相談所、託児所、乳児院などの社会施設が次々に設立されたのである。このうち、大阪市立児童相談所については、阪神児童相談所の項で後述する。

1919（大正8）年7月には、鶴町第一託児所（西区鶴町1丁目）が開設された。その後、同年8月には、桜宮託児所（北区中野町字北中野）、1921（大正10）年4月には、鶴町第二託児所（西区鶴町4丁目）が開設される。定員は、各70名、50名、70名、満2歳から学齡に達するまでの幼児を対象とし、毎日午前7時より午後5時まで開所、簡単な談話、遊戯、唱歌などを行っていたという。また、保育料は無料とし、間食などもすべて市費によって支給されていた。

大阪市立乳児院は、1921（大正10）年11月に北区本庄黒崎町において開所した。定員は50名。昼間労働に従事する親のため、満2歳までの乳児を午前6時から午後6時まで無料で保育した。ここでは、医師の監督下における合理的な保育が行われ、乳児の診察及び応急手当、育児相談など、すべて無料で実施されたといわれる。1922（大正11）年には、業務拡張を行い、市内のいわゆる中産階級以下の家庭すべてをその対象とした。

その後、三田谷は、1921（大正10）年、大阪朝日新聞記者高尾亮雄らとともに、児童愛護宣伝運動を成功させた⁽²⁾後、大阪市役所を退職し、母校大阪医科大学へ戻って研究に没頭した。そして、学位論文が通過した後は、兵庫県武庫郡精道村（現・芦屋市）役場に彼が併設していた阪神児童相談所を基にして、三田谷治療教育院を1927（昭和2）年に設立、経済面等での紆余曲折はあったが、乳幼児から青年にいたるまでの相談、教育、そして福祉の総合センターとしての役割を持つ治療教育院の運営をめざして精力的に活動し、1962（昭和37）年に永眠した。なお、三田谷啓の詳細な経歴については、自らの執筆による伝記『山路越えて⁽³⁾』（1931）、津曲裕次著「解説」（復刻『育児雑誌』別冊、大空社、1986）に記されている。

3. 三田谷啓の業績

「医学と教育の握手」が、三田谷啓のモットーであった。それは、治療教育、すなわち身体的もしくは精神的に恵まれない子どもたちに対して、医学・教育の二方面から最も適切な方法を考察しようとするものであった。また、前述のように、東京で、日本最初といわれる私設児童相談所「児童教養相談所」にかかわったことを契機として、大阪へ居を移してからは、精道村役場の楼上で、週一回の児童相談を行った。そして、それら相談事業の傍ら、大阪市における総合的な児童保護事業への着手、さらには「母の会」結成による母性保護、児童保護の啓蒙を開始した。

三田谷は、皇室に対しても、母性教育実施機関の設立を請願していたが、恩賜財団「母子愛育会」の設立後はその理事となる。さらに、念願の三田谷治療教育院開設の後には、そこを拠点として、講演活動や雑誌発行などを行った。「阪神児童相談所」および「三田谷治療教育院」についての詳細は、次のとおりである。また、時期が前後するが、大阪市の児童課長時代に三田谷が組織していた「日本児童協会」についても、彼の業績から見落としてはならないであろう。児童文化との関連においても重要事項と考え、別に一項を設けた。

① 阪神児童相談所

1923（大正12）年7月、三田谷啓は、精道村役場（阪神電車芦屋停留所南側）の二階において、阪神児童相談所を開設した。彼にとって、大阪市を退職後、最初の実践活動の場であったといえる。開設の目的は、「こどもの教養の相談に応じ」ること、及びその「教養に関する知識の普及⁽⁴⁾」を図ることであった。

これより先、1919（大正8）年に、三田谷が立案した大阪市内児童相談所が、南区宮津町に開所している。これは、当時珍しかった聴力検査用の防音室や、研究室、講堂、教育相談室、図書室などを備えた立派なものであったという。別館には、日本で最初の公立の知的障害児通園施設である「今宮学園」の教室や遊戯室も設置された。

業務としては、相談部、学園部、研究部、庶務部が組織され、午前は主に所員の研究時間、午後には相談時間とされていた。相談部では、両親の相談、児童相談に分かれて、専門家が相談にあたり、各種知能検査も行われたとされている。また、学園部は、知的障害児と身体障害児の二部に分かれていた。さらに、2年次には、事業の拡張を行い、出張相談の開始や図書室の公開など、地域の一般の人々にも啓蒙を図っている。その他、「余暇の利用、娯楽の提供、自学自習の習慣養成、運動遊戯の奨励」を目的として、児童文庫の開設、月2回の少年倶楽部お伽会の開催なども行い、子ども会「星の会」を結成して劇や童話をとおしての啓蒙活動も、児童及びその親に対して行った⁽⁵⁾。

大阪市内児童相談所は、市当局の無理解により、1924（大正13）年には閉鎖されてしまうが、自ら立案したこの児童相談所の建設、運営が、阪神児童相談所の素地になっていることは間違いない。

阪神児童相談所における事業は、「20歳までの児童に関する身体、学校選択、職業選定、教育等に関する相談」の他、①講習、講演、母の学校、修養会、処女会、家政補助婦会等、②児童教養に関する印刷物の出版、③児童教養展覧会、幻燈、活動写真会、④児童教養に関する調査などを取り扱っていた。相談日は毎週火曜日13時から18時、所員は、三田谷主任と入間田悌吉相談員であった。1923（大正12）年には、月刊の機関誌「児童相談」を創刊している。

また、大阪方面の相談者のために、大阪市南区（現・中央区）三休橋南詰に大阪出張所を開設、三田谷所長が相談に応じた。大阪出張所においても、夜間の集談会などが開催され、育児に関する講演会などが行われたという⁽⁶⁾。なお、三田谷啓の業績をより鮮明にするためには、機関誌「児童相談」についても検討し、当時の児童相談の現状を知ることが必要であると思われるが、それは今後の課題としたい。

② 三田谷治療教育院

大阪市内児童相談所時代に接した知的障害児のなかの十数名に、何としても収容保護の必要性を感じていた三田谷啓は、その頃より、施設設立の意向を固める。そして、1927（昭和2）年、国内6ヵ所目の知的障害児施設として、念願の三田谷治療教育院を、現在地の兵庫県芦屋市に開設、知的障害児および病・虚弱児のみならず、いわゆる学業不振児をも入所させ相談に応じた。

当時の学校教育制度のなかで、障害児教育は法的な裏づけもないまま、政府から放置され、国民の

関心も薄いままであった。1892（明治25）年、日本で最初の知的障害児保護施設「聖三一孤女学院」（現・滝乃川学園）が、石井亮一によって開設されたが、その後も、1900（明治33）年には小学校令改正において、盲啞以外の障害児の就学免除が規定されるなど、障害のある児童の教育は、義務教育以外の部分に委ねられていた。だが、それらの受け皿は決して十分とはいえず、知的障害児の受け入れは、「孤児院」（現・児童養護施設）や「感化院」（現・児童自立支援施設）といった施設でなされることも多かった。

そのような状況にあって、三田谷治療教育院が当時の他の施設と異なるのは、人工太陽灯室や光線浴室、水浴室などを備えた、近代医学に基く治療教育を前面に打ち出していたところであった。これは、現在の施設環境をめぐる問題を考えるときにも、注目に値すると思われる。

1929（昭和4）年、三田谷は、母子保護の知識を深めることを目的として、院内に「日本母の会」を設立、1935（昭和10）年には、自らがその創立基盤を作ったともいえる恩賜財団「母子愛育会」の理事に就任した。また、1934（昭和9）年、「日本精神薄弱者福祉協会」（現・日本知的障害者福祉協会）が結成され、3年後には三田谷啓も加盟している。

さらに、1938（昭和13）年には、学齢期の障害児のために、1926（昭和元）年創設の「芦屋児童の村小学校」を前身とする学校法人「翠丘小学校」をも開設している。この小学校は、新教育運動の象徴的存在として、現在でも高く評価されており、遊びや実生活をとおした総合学習を実施するなど、個性尊重の教育方針を掲げ、1989（平成元）年まで存続した。いわゆる「特殊学級」が、全国の小中学校に本格的に設置されるのは1960年代であるから、三田谷の先駆的思想と実践の価値が推し測られる。

なお、1947（昭和22）年の児童福祉法改正後に認可施設となった三田谷治療教育院は、現在、社会福祉法人「三田谷治療教育院」として、知的障害児施設「三田谷学園」、知的障害者入所更生施設「芦屋翠ホーム」、知的障害者通所授産施設「ワークホームつつじ」が運営され、三田谷の意志は受け継がれている。

4. 「日本児童協会」と三田谷啓

「日本児童協会」の設立経緯や詳細な運営内容は、未だ明らかになってはいないが、三田谷啓が主宰する「児童保護に関する研究団体」として、多方面にわたって活動していた。顧問には、三田谷のほか、高島平三郎、野上俊夫ら、13名の著名な医学博士や文学博士が名を連ねている。

また、「日本児童協会」趣意として、「家庭の改造、社会の改造、国家の改造も結局はコドモの改造から」始めることが最適であるとし、複雑化していく児童教育の方法において、「理論と実際の方面に於て、どこまでも児童保護者の好伴侶たらんことを期」すことを掲げている。

なお、以下のような規程も設けていた。

第一条 本協会ハ日本児童協会ト称シ事務所ヲ大阪市北区曽根崎中二丁目百八拾九番地ニ置ク

第二条 本協会ハ左記各項ノ事業ヲ行フヲ以テ目的トシ之ヲ學術部及ビ実行部ノ二種ニ分ツ

- 一．児童ノ保健、衛生、教育ニ関スル學術及ビ實際的研究並ニ普及
- 二．第一項ノ事業ヲ達成スル為ニ講演出版並ニコノ普及ヲ助成スル一切ノ事業
- 三．児童ノ保健、衛生、教育ニ関スル材料ノ蒐集及ビ取次
- 四．児童ノ保健、衛生、教育ニ関スル諸考案及ビ諸發明ニ関スル事業
- 五．児童教育を主トスル社会事業

第三条 本協会ハ前条ノ目的ヲ遂行スル為ニ斯道ノ専門大家ニ顧問ヲ依嘱シソノ指導ヲ受ク

第四条 本会ノ趣旨ニ賛成者ハ会友タルコトヲ得

第五条 会友八第二条ノ事業ニ関シ本協会ヲ利用スルコトヲ得

第六条 会友ハ一ヶ年金三円ヲ納ムルモノトス

第七条 会友ハ本会ノ機関雑誌日本児童協会時報ヲ無料ニテ頒布ヲ受ク⁽⁷⁾

上記のように、事務所は大阪市内に置かれていたが、会員の増加とともに、支部や各地域での組織が多数結成され始めた。1921（大正10）年9月には、大阪市外玉出町において、町長や学校長を發起人として玉出児童研究会が組織された。また、同時期に、東京築地精養軒（京橋区采女町32番地）にも、東京支部の事務所が置かれている。さらに、1925（大正14）年頃には、島根県津和野にも支部が結成されたという⁽⁸⁾。

「日本児童協会」は、このような支部を中心に、「児童教養講演会」「家庭講演会」「お伽話講演会」「乳児に関する展覧会」をはじめ「性教育講習会」なども開催していた。また、実行部の活動として、三田谷執筆の啓蒙書などとともに、児童の栄養を考慮した「キョーカイ・センバイ」「キョーカイ・ケーキ」の販売まで行なっていた。

講演会の開催は、特に、同会が重要視していた活動であったが、「活動写真応用児童教養講演会」と称するものも開催され、映画や掛図など、視聴覚に訴える斬新な方法を取り入れ、多くの若い母親や、保育・教育の関係者を惹きつけたといわれる。

5. 雑誌「日本児童協会時報」と児童文化

「日本児童協会」は、前項の規程第七条に見られるように、機関誌「日本児童協会時報」を発行していた。創刊は、1920（大正9）年7月10日、発刊の辞には次のように述べられている。

- 前略 -

如何にしてコドモの教養の実を全ふすべきかを考ふことは親たるものゝ一日も忽にすべからざることである。これには教養の方法を知ることが大切である。親に溢るゝばかりの愛情ありとも教養の方法を誤りて子を殺すに至りし实例は決して少なくない。上流にも知識階級にも斯かる悲劇の行われつゝあることの多きを思へば、児童教養法の尚ほ徹底せざる実に甚しいと云はねばならぬ。

本協会の機関雑誌「日本児童協会時報」は、この間に處して世の親達の為めに好伴侶たらんことを期して生まれたのである。

- 後略 - ⁽⁹⁾

「日本児童協会時報」は、月刊で発行され、社説や講話、論文、催事情報など、毎号多分野にわたる数多くの文献が掲載され、機関雑誌としては非常に充実した内容のものであった。執筆者も、挿話や短話に至るまで、三田谷啓をはじめとする大勢の医学者や文学者が名を連ねている。

なお、この「日本児童協会時報」は、1923（大正12）年12月10日発行の第4巻第12号より「育児雑誌」と改題され、さらに、1928（昭和3）年12月10日には「母と子」と改題されることになる。本稿では、前者2誌をとりあげた。

同誌には、第一巻の総目次を見るだけでも、「生活改造と都市に於ける子供の保護について」（長濱宗佑）、「育児法の理想」（矢野雄）、「児童相談所の概況」（鶴川富尾）、「児童を虐待する国語教育」（櫻根孝之進）、「市内児童の娯楽の研究」（大村宗嗣）、「賢い子より強い子」（巖谷小波）、「不良少年少女の発生とその救済」（斎藤清吉）、「少年法案の根本精神」（山岡萬之助）など、多岐にわたる文献が掲載されている。

児童の文化（財）に関連するものでは、「玩具選択の基準」（藤五代策）が見られ、また、音楽会や

展覧会、お伽講演会の開催情報、児童の遊びの問題に関する報告等が掲載されている。これら児童文化関連の記事・文献は、号数を追うごとに徐々に増える傾向にあり、「文化運動と児童保護」(高島平三郎)「恐ろしき子供雑誌の色彩」(望月クニ子)「児童と遊戯」(野上俊夫)「児童遊戯場に就て」(石原憲治)「幼児教育の手段としてのお話の仕方」(倉橋惣三)「児童文学に関する一考察」(秋田雨雀)「童話界最近の傾向」(山崎みつ子)「玩具に就て」(黒澤文七・佐々木武雄)「コドモの絵本」(三田谷啓)などが続いた。詳細は、資料に示したとおりである。

執筆者は、当時その分野で活躍していた錚々たる人物であり、三田谷の交友関係の広さがうかがわれる。また、内容的にも、玩具、絵本、児童文学、童謡など、主要な児童文化財を網羅しており、遊戯や遊戯場に関する問題を扱ったものも数多く見られる。いずれも三田谷をはじめ、種々の分野における研究者の、児童をとりまく環境や諸状況を見極める確かな視点が随所にうかがわれ、現代の児童に関する研究雑誌と比較してみても、遜色のないものであると思われる。

例えば、三田谷は、第3巻268頁に、「コドモの絵本」と題した文章を掲載しているが、「コドモの為に適当な刺戟物の一つは絵本である」と述べ、日本における「コドモ用絵雑誌がとても数え切れぬほどある」にもかかわらず、「真に用ひ得べき小児用絵本の甚だ少い」ことを憂えている。

そして、まず、第一に衛生的見地から、文字の大きさや鮮明さの度合いに注意が必要であることを指摘している。文字の大きさについては、具体的にポイント数を挙げ、近視や姿勢の悪化を防ぐために、年齢に応じた大きさの文字を使用すべきであることを説いた。また、印刷の鮮明さを欠くものについても、改善すべき点を挙げている。

第二に教育的見地として、①内容の教育的でないものが少なからずある ②彩色は単純で良いにもかかわらずケバケバしいものや俗悪なものが多い ③廉価多売を主とするため、紙質や印刷の粗悪なものが多い ④絵本画家に、児童を理解している人が少ない ⑤コドモは快活で滑稽じみたものであるが、俗悪な滑稽さは良くない ⑥絵本に悪戯を示してはならない など、具体的に注意すべき点を列挙している。

さらに、「成人が軽く考へて居るよりも、コドモは寧ろより多くの感化を絵本から受けて居る⁽¹⁰⁾」のであると述べ、保護者に対して、良い絵本を慎重に選ぶことの重要性を説いた。これらの絵本に対する見方は、従来の、そして現在においても、ともすれば絵と文章の良悪のみに終始しがちな絵本の評価の方法に、大きな示唆を与えてくれるものであると思われる。

6. おわりに

柴崎正行は、三田谷啓の児童保護思想の特徴として、三つの要因を挙げている⁽¹¹⁾。第一に、キリスト教的な平等観であり、これは、障害のある児童も含めすべての児童に対して、各々の状態に合わせた教育ができるとする彼の主張からも明らかである。第二には、児童中心主義心理学の影響であり、児童の個性を尊重する彼の児童教育観の背景には、高島平三郎、久保良英らとの親交が影響を及ぼしているといわれる。さらに、第三には、西欧、特にドイツの児童保護システムの影響を強く受けていることが指摘されている。5年間のドイツ留学中に、彼は、治療教育院および児童保護施設を見学し、それらの必要性を痛感していた。まだ、日本ではなかなか理解の得られない思想ではあったが、彼の真摯な努力や人徳によって、後にそれらは治療教育院設立というかたちで結実した。

母親教育、乳幼児教育、障害児教育、青年教育、そして性教育に至るまで、三田谷啓のかかわった仕事は多岐にわたるが、その根底には、常に、すべての児童に対する理解と愛情が存在していたといえる。「コドモは強く賢く且善良に育てて貰う権利があるのです⁽¹²⁾」と、三田谷は記している。障害の有無にかかわらず、すべての児童の権利擁護を訴えた三田谷啓は、そのような面でも先駆者であった。

「日本児童協会時報」および「育児雑誌」「母と子」は、「治療教育」を行うにあたっての医学と教育の連携と、母性教育・母性保護のうえに成り立つ児童の健全育成を提唱した三田谷にとって、自らの研究と実践を遂行するとき、その根幹を成す重要な拠所となるものであった。

三田谷啓の育児教育観のなかで、身体に関する知識（児童生理、栄養、看護）および精神に関する知識（児童心理、教育）は、二つの大きな柱であったが、特に後者では、種々の児童文化財が重要な役割を果たすことが主張されている。彼が、それらの知識を得た背景には、幅広い交友関係があったと考えられるが、いかなる児童に対しても最適な教育を受けさせることの必要性を説いていた彼の教育観に、児童文化財が重要な位置を占めていたことは興味深い。

三田谷啓は、すぐれた研究者であったが、同時に、彼のかかわったどの分野においても、行動力あふれた実践家であった。わずか3年間という短い期間に、彼が先鞭をつけた数々の大阪市の事業は、現代の児童福祉の分野における基盤となり得るものばかりである。しかしながら、「本来彼が活躍し、その本領と考えていた諸領域でほとんど取り上げられないという事実⁽¹³⁾」と、津曲裕次が憂えているように、現在、三田谷の業績が顧みられることが少ないのは、彼の分野を越えたフィールドの広さ、そして深さを理解できる人間が稀少だということにほかならない。

だが、現代社会のなかで、児童の発達をめぐる様々な問題を考えるとき、彼が提唱してきた、母性保護、母子衛生、小児保健、育児教育、そして児童文化や児童福祉など、多岐にわたる分野の連携が必要になることはいうまでもない。今さらながら、三田谷啓が行ってきたさまざまな研究、そして実践について見直してみる時期ではないかと考える。

註

- (1) 津曲裕次「解説」(復刻『育児雑誌』別冊 大空社 1896)頁7
- (2) この運動が、現在の「児童福祉週間」(5月5～11日)の基になったといわれる。
- (3) 1987年、大空社より伝記叢書第12巻として復刊。
- (4) 前掲書⁽¹⁾頁27
- (5) 前掲書⁽¹⁾頁14
- (6) 前掲書⁽¹⁾頁28
- (7) 「日本児童協会時報」第1巻第1号巻頭
- (8) 前掲書⁽¹⁾頁20
- (9) 前掲誌⁽⁷⁾頁1
- (10) 復刻版「育児雑誌」第3巻頁269
- (11) 柴崎正行「『愛育の書』解題」(『現代日本児童問題文献選集』第29巻 三田谷啓著 日本図書センター 1988所収)
- (12) 『子供を強くする為に』実業之日本社
- (13) 前掲書⁽¹⁾頁8

参考文献

復刻 日本児童協会編『育児雑誌』大空社 1896
 竹内章「ひと萌ゆる」(発掘・ひょうごの近代鉤脈)神戸新聞 2000 8 9付
 社会福祉法人「三田谷治療教育院」パンフレット

本稿は、日本保育学会第55回大会(2002年)および同56回大会(2003年)における口頭発表原稿を加筆修正したものです。なお、その際に、三田谷啓文庫(三田谷学園内)の貴重な文献・資料を閲覧させていただきました。ここに記してお礼申し上げます。

【資料】

日本児童協会時報(第1巻～第4巻)および育児雑誌(第5巻～第9巻)に見られる児童文化(財)関連記事

巻数	頁	題名	筆者	分類
第1巻	178	玩具選択の基準	藤五 代策	紹介
第2巻	142	恐ろしき子供雑誌の色彩	望月クニ子	講話
第2巻	162	児童と遊戯	野上 俊夫	講話
第2巻	262	児童遊戯場に就て	石原 憲治	講話
第2巻	304	子供の性質に適応した玩具の分類	上々手よし子	講話
第2巻	21	蓄音機で子供に舞踊	小山ひで子	卓語
第2巻	57	お伽噺は子供に軽信を教へる	モンテソリー	卓語
第2巻	152	学校で活動写真を見せるが可い	小西 重直	卓語
第2巻	216	童話選択上の諸原則に就て	松村 武雄	卓語
第2巻	248	教育家と提携して童話劇を望む	片山 伸	卓語
第2巻	371	子供と音楽	志賀志那人	訪問録
第2巻	276	新作童話太一さんと鱈屋のお爺さん	膳 たけ子	雑録
第2巻	154	幼児教育の手段としてのお話の仕方	倉橋 惣三	紹介
第2巻	188	児童文学に関する一考察	秋田 雨雀	紹介
第2巻	251	児童の色彩教育	黒田 朋信	紹介
第2巻	316	童話界最近の傾向	山崎みつ子	紹介
第3巻	1145	玩具に就て	黒澤 文七・佐々木武雄	講話
第3巻	268	コドモの絵本	三田谷 啓	講話
第3巻	360	玩具でなほせる子供の悪癖	藤五 代策	講話
第3巻	349	童謡の使命	千葉 春雄・田中豊太郎	抄録
第3巻	374	童話劇に就て	小瀬松太郎	抄録
第4巻	24	コドモにはどんな絵本を与ふべきか	権田保之助	家庭
第4巻	55	童謡教育	野口 雨情	家庭
第4巻	110	都市の子供に運動場	田村 剛	家庭
第4巻	141	音楽教育に蓄音機の利用	田邊 尚雄	家庭
第4巻	146	児童用書を選んだ理由	松村 武雄	家庭
第4巻	183	玩具の教育的価値	倉橋 惣三	家庭
第4巻	213	童謡を通して見た子供の自然観	北原 白秋	家庭
第4巻	90	童話の心理と教育	桑田 芳蔵	抄録
第4巻	152	ボストンの児童美術館	倉橋 惣三	抄録
第4巻	185	児童劇の使命及び効用	坪内 逍遙	抄録
第4巻	348	児童劇の衣裳と舞台	坪内 逍遙	抄録
第5巻	363	児童の遊戯	村上 鋭夫	講話
第5巻	56	遊びと唱歌	土川 五郎	講話
第5巻	208	児童の芸術的製作の指導について	石原 純	講話
第5巻	210	童話の意義と其の教育的価値	山崎 光子	講話
第5巻	29	童話の仕方と工場講演	松 美佐雄	抄録
第5巻	125	小学校に於ける文化的施設	沢田 哲成	抄録
第6巻	64	コドモと絵本	三田谷 啓	講話
第6巻	135	児童の遊具	村上 鋭夫	講話
第6巻	12	コドモに読ませてよい図書	小原 国芳	叢談
第6巻	14	学校劇禁止の是非	澤柳政太郎	叢談
第6巻	16	欧米の音楽教育概観	小松 耕輔	叢談
第6巻	42	児童読物としての子供雑誌	鷲尾 知治	叢談
第6巻	148	所謂学校劇と私の言ふ児童劇	坪内 逍遙	叢談
第6巻	213	唱歌に関する注意	森川 正雄	叢談
第6巻	241	幼児に聞かせる談話	森川 正雄	叢談
第6巻	309	童謡の話	西條 八十	叢談
第6巻	246	遊技の指導法	西園 富吉	抄録
第6巻	278	コドモの読物調査機関設置の必要	鷲尾 知治	抄録
第6巻	279	遊戯の哲学	山本壽喜多	抄録
第7巻	122	遊戯と体育	村上 鋭夫	講話
第7巻	283	遊戯選択の方針	竹内 薫兵	叢談
第7巻	310	お伽噺と教育	岩佐虎一郎	叢談
第7巻	336	白粉と玩具の話	岡本 孝	叢談
第7巻	348	童話と童謡について	倉橋 惣三	叢談
第7巻	21	幼児の舞踊について	倉橋 惣三	抄録
第7巻	236	映画の教育的利用に就て	関 猛	抄録
第7巻	255	舞踏教育	谷口 武	抄録
第7巻	258	遊戯に於ける教育的経験	島田 正蔵	抄録
第8巻	227	絵画に於ける教育	三田 谷啓	講話
第8巻	123	有益な遊びと悪い遊び	武川筆三郎	叢談
第8巻	301	かういふ風に図画を教へて見たら	岡 丘丈生	叢談
第8巻	26	駄菓子の話	竹内 薫兵	抄録
第8巻	112	児童芸術の相互扶助	沖野岩三郎	抄録
第8巻	266	家庭教育とコドモの読物	倉橋 惣三	抄録
第8巻	275	コドモに歌はせたくない童謡	小林 民弥	抄録
第8巻	303	家庭文庫の整理	田中 鉄三	抄録
第9巻	115	コドモの言葉	相馬 御風	叢談
第9巻	138	音楽教育の提唱	佐々木秀一	叢談
第9巻	199	映画と児童	倉橋 惣三	叢談
第9巻	257	犯罪少年と活動写真	青木誠四郎	叢談
第9巻	279	児童課外読物について	八波 則吉	叢談
第9巻	289	家庭に於ける芸術教育	倉橋 惣三	叢談

Child Welfare and Culture in Educational Therapy - A Study of Hiraku Sandaya

Noriko KAWAKITA

Since the Meiji era, scholars from various fields have become interested in child culture. Hiraku Sandaya is one of those scholars.

Sandaya, himself studied in a number of fields - medicine, occupational therapy, the protection of mother and child, and child care education, for example. In his writings the notion of the cultural assets of the child is prominent. He consistently argued that the cultural assets of the child play an important role in protection and education.

Sandaya became the inaugural head of the department for children's welfare in Osaka city. In this role, he developed a remarkable range of services for the administration of child welfare. His studies, however, have disappeared one by one because of their great diversity.

The aim of this paper is to re-evaluate his studies especially in the areas of child culture and welfare.